

学びの機会を保障し
COVID-19 収束後の大学教育を
見据えた星槎大学の取り組み

星槎大学副学長

共生科学部長

大学院教育学研究科修士課程長

鬼頭秀一

星槎大学の教育

- 共生科学部 通信制課程
 - 共生科学部は、箱根町と横浜市青葉区に本部校舎
全国20カ所のサテライト（北海道から沖縄まで）、
沖永良部島サテライト、丹波コミュニティカレッジ等
- 大学院教育学研究科 通信制課程（修士・博士課程）
- 専門職大学院教育実践研究科 通学制（修士課程）
 - 大学院は横浜情報文化センターにキャンパス

COVID-19 前

- 遠隔合同授業（横浜会場発信、全国10箇所程度のサテライト会場、自宅受講若干名）。以前はソニーPCS、3年前からZoomに切り替え、併行。
- 大学院は、通学制の研究科も含めてすべての講義はZoom。
- スタジオ録画型授業動画の本人確認・認証付きでのオンデマンド受講を併用。
- 開講会場の地理的制限に限定されない受講と、いつでも学びができる、学びの機会の柔軟化に取り組む。
- 従来の固定したサテライトを超えた、地域連携の試み
沖永良部島サテライト、丹波コミュニティカレッジとの連携

星槎大学の危機管理レベルの設定と スクーリング受講の開講基準ガイドライン (COVID-19 と1年～1年半の長期戦)

- 危機管理レベル0=感染未確認地域
会場で開講し、学生の会場での参加も可能
- 危機管理レベル1=感染確認地域
原則として、Zoomによるオンライン授業。教職員は会場または自宅での発信、学生・大学院生は自宅受講。例外的に会場で対面の形で開講する場合には、「3つの密」を避け、人数を制限して開講する。
- 危機管理レベル2=感染拡大警戒地域(4月8日現在の横浜)
Zoomによるオンライン授業のみ。
教員は自宅から発信、学生は自宅受講とする。
- 危機管理レベル3=都市封鎖的状況
Zoomによるオンライン授業のみ。教員は自宅から発信、学生はいずれも自宅受講のみ、職員も自宅から対応する。

COVID-19 以後の展開

さらには、COVID-19 収束後も視野に

- 「開講会場の**地理的制限に限定されない受講と、いつでも学びができる、学びの機会の柔軟化**」を前倒して実現する
- 一学生も教職員も危機意識の共有で乗り切る

COVID-19 以後の展開

さらには、COVID-19 収束後も視野に

- **1. とにかくやってみる段階**

- 2月29日・3月1日に300名近い学生とオンライン授業に比較的消極的な教員数名が三日間の準備期間で9割の学生が参加して自宅でのZoomを用いたオンライン授業を可能にした。(成功体験に)
- 4月末までの行事や会議は全てZoom対応で、オンラインが日常的なものになった。

COVID-19 以後の展開

さらには、COVID-19 収束後も視野に

• 2. 誰一人取り残さない段階

- 全学生と非常勤講師へのオンライン授業の情報環境のアンケート(集計することが目的ではなく、困難を抱えた学生や教員を掘り出し、個別対応で、オンライン授業を可能にするため)
 - 全体的には既に職を持っている年齢層で比較的環境自体は整っているが、低年齢層の通信の従量制契約層と高年齢のITスキルのない層が課題
- 小さいお子さんをお持ちの方で家庭で自宅受講が難しい方々
 - 近くのサテライト等で個別受講できる配慮の必要
- 非常勤講師には4月下旬にオンライン授業のFD研修会

学びの機会を保障するーオンラインだからできること

- **対面授業の代替ではなく、オンライン授業の可能性の追求**
 - 対面で行われた多くの学びは、オンラインでも代替可能、また、教育効果を高める可能性
 - 主体的・対話的で深い学びは、むしろ、ICT技術で高めることができる
 - 教室で対面でオンライン参加するより、教室の学生も全員がオンラインで入った方が、一体感もあり、教員や他の学生との一体一の関係性の構築が可能
 - 遠隔地の学生が同じ時間を共有することの意味
 - 多様な学生による多様性を保障する学び
 - いままで大学の学びに課題がある学生が自宅から学びを可能

学びの機会を保障するーオンラインだからできること

- **COVIS-19は1年から1年半の長期戦**

- **対面が必要な科目の戦略的配置**

- 主体的・対話的な学びを追求する科目と、
定型的な知識の学びを行う科目との
メリハリをつけ、それに相応しい
多様な学びの学修形態を戦略的に配置する
- 対面がどうしても必要な科目（教職の指導法、実技科目等）
に関しては、危機管理レベルが低い時期に設定し、オンライン
での代替の方法も可能な限り追求する
- 体育の実技科目をオンラインで行う可能性の追求。
撮影した動画を評価の対象にするなどの検討

学びの機会を保障するーオンラインだからできること

- **社会がどんな事態になっても、
また世界中どこからでも学べる形を考える**
 - 安全を確保するために
学びが失われることがあってはいけない
 - COVID-19で収入的に学びの機会を失う人たちに、もっと柔軟に学びの機会を届けることの必要性
 - 過疎の村、離島でも、そこに暮らしながら学べる機会を作る

学びの機会を保障するーオンラインだからできること

- **すべての人に学びの機会を**

- 精神的に大学に行けない、大学という学びの制度に馴染めない学生さんの学びを支える
- 経済的に大学に行けない、収入的に学びの機会を得られない人たちの学びを支える
- 地域的に大学にアクセスできない人たちにローカルに暮らしながらユニバーサルに学べる機会を作る

未来の大学教育のあり方を構想しつつ、 COVID-19収束後の学びのあり方を構築する

- オンライン授業が当たり前になる社会、テレワークが普通になる社会により、「大学」という制度が解体される
- 「時間」(いつでも)、「経済的・精神的条件」(だれでも)、「空間」(どこでも)を超えた、バーチャルでユニバーサルな学びと、ローカルでしかできない学びを、それぞれの地域で展開し、「大学」という箱から自由に
- オンライン授業だからこそ対面的な深い学び
- オンライン授業ではできない地域の実習プログラム

未来の大学教育のあり方を構想しつつ、 COVID-19収束後の学びのあり方を構築する 星槎大学の取り組みから

- 世界中どこからでも参加できる、オンラインの「ゼミナール」授業（共通の時間設定の工夫）
- 多様な地域から参加している多様な学生の主体的・対話的な学びを実現するオンラインのグループワーク
事前に、自由にデザインする必要性。時程等プログラムする。
- 地方の小都市や離島、過疎の村での地域プログラムで、リアルで身体的関わりを重視した学び（実習プログラム）
- いつでも、どこでも学べるオンデマンド授業
- 通信制と通学制の枠を超えたシームレスな学びへ